
セイレーンの貝殻

スエルテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セイレーンの貝殻

【Nコード】

N2324H

【作者名】

スエルテ

【あらすじ】

船乗りを誘惑し、深い海に引き込み、その死肉を食らうと恐れられるセイレーンのお話。ダークです。おとぎ話的な人魚ではなく、魔物としてセイレーンを書いてますので、イメージを壊したくない方はご注意を。短編です。

螺旋状の貝殻には、海で亡くなった船乗りの魂が閉じ込められていると言っ。

彼女と会ったのは、嵐の夜、浜でだった。

どこから来たのか、頭からつま先までずぶ濡れで、ただじつと岩陰に佇んでいた。沖で難破した船の乗客だったのか。訊ねても、よほどのことがあったのか、ただ俯くばかりで。

長い艶やかな黒髪が腰の下まで伸び、濡れた肢体に服の上から絡み付いていた。伏し目がちの蜂蜜色の瞳を隠す、長い睫毛。白い肌に鮮やかな色を添える唇。

どこの者かは知れないが、美しい女であることは確かだった。

唯一の家族であった船乗りの兄の行方が知れなくなっってからというもの、話し相手に事欠いていた俺は、押し黙ったままのその女をとりあえず家まで連れて帰った。暖かい場所で身体を乾かせば、少しは話す気力も出るだろうと思っただけのことだった。

「なあ、あんたどこから来たんだ？」

暖炉の前に座らせ、温めたミルク酒を手渡して暫くしてから再び訊ねたが、相変わらず口を噤んだままだ。

「こんな嵐の日に浜にいたなんて、よっほどのことがあっただらうっ？」

軽く爆ぜる炎に白い肌が浮かび上がる。短い袖から剥き出しの腕。異様に艶めかしい光景だ。慌ててその肩に厚い毛布をかける。己の

目から隠す為に。

「ずっとずぶ濡れで外にいたからまだ寒いだろう。今日はここで眠るといい」

言い訳するかのように早口に告げ、俺はその場を離れた。少し休ませよう。話を聞くのはそれからでも遅くない。

ちら、と一瞥された気がして振り返ったが、気のせいだったようだ。

夜中に息苦しさを感じて目を覚ました。

明りは消していたので、完全な暗闇だ。強い風が木製の戸を揺する音がゴトゴトと響いていた。

するり、と何かが頬を掠める。何事かと身体を強張らせる。やがて暗闇に慣れた目が捉えたのは、蜂蜜色の瞳。あの女だった。俺の頭の両わきに手をつけて、見下ろしていた。

「あなた、妻はいないの？」

「な……」

何？

我が耳を疑う。

「妻はいないの？」

答えないでいると、聞こえなかったと思ったのか、先ほどと全く変わらぬ口調で問われた。

この異様な状況で、しかも自分の名も名乗らず、助けた相手の名

を問うわけでもなく。

けれど、その声も容姿と違わず美しかった。いつまでも聴いていたい。そう願いたくなるほどで。

「……妻はまだない」

自分でも不思議に思うが、その問いに答えなければならぬ気がして。嘘をつくことだってできるのに、本当のことが口を突いて出ている。

頬にかかる髪からか、甘い匂いが鼻孔をくすぐる。ひた、と目を真つ直ぐに射抜かれて居心地の悪さを感じ、視線を落とす。

すると目に入ったのは、赤い唇、細く白いなめらかな首、そして豊かな胸の膨らみ

思わず喉を鳴らすと、女がくすりと笑ったようだった。

「そう。では、わたしがあなたの妻になるわ」

そう聴いた途端、意識が白濁した。薄れる意識の中、輝く双眸が細められたのを見た。あるいはそう錯覚したのかもしれない。

翌日に目を覚ますと、辺りはすっかり静まり返り、海も穏やかに凧いでいた。

昨夜のことは夢だったのだろうか？ 訝しがりながらも隣の部屋へ行くと、暖炉の前の古びたソファに、彼女の姿があった。まだ眠っている。

服も髪も乾き、昨夜の婀娜あだな様子は消え失せていた。やはり夢だったのだろうか、と結論付けて納得する。

近付いて整った顔を見下ろすと、瞼が震えた。

「あ……」

目が合うと、微かにたじろいだ。

「あの、わたし……昨日はお礼も言えなくて」

彼女の落ち着いた様子を見て、ほっとする。

「相当参ってたんだろ。気にしないでいい。……あんだ、帰る場所はあるのか？」

邪魔で早く追い出したいとかそういうわけではない。だが、どうも昨夜のことが頭から拭い去れず、できることならすぐにでも別れたほうがいい、と感じた。

しかし、それに彼女は眉根を寄せて顔を伏せた。

「わたし、誰も頼る人がいないんです。家事をしたりしますから、ここに置いてもらえませんか？」

返答に詰まってしまう。

どうする？

身寄りの無い若い女を外に放り出すのも気が引ける。

いや、しかし……あまりにも不可解なことが多すぎる。そもそも、何者なのか。

「ごめんなさい、何も覚えてないんです。思い出そうと何度もしてるのだけど」

俺の表情から言いたいことを察したのだろう、本当に済まなそうな小さな声で告げられた。

「記憶が戻るまで構わないから、どうか」

俯いて、上目遣いで懇願し、そしてまたすぐに長い睫毛に隠れる金色の瞳。

それに、俺は抗えなかった。

それから数年、彼女と暮らした。

あの初日の夜のことは今でも覚えている。そして、あのことをお互いに口にすることもなかったけれど、結果的にはあの言葉通りになった。

今は、妻となった彼女を心から愛している。そしておそらく彼女も。

ただ、彼女には不思議な癖があった。

目を見つけては、それにそっと口付けを落とす。何かのまじまないのか、と問うと、決まってこう答えた。

「自分でも分からないわ。でも、こうすると落ち着くの」

そうやって微笑を浮かべる妻の姿は、出会った頃と全く変わらない。歳を重ねることを忘れてしまったのだろうか？

だが心配なこともあった。目を見張る美しさはそのままだが、彼女は少しずつ衰えていつているように思える。元気がなく、気付いたら身体をソファに預け、ぼんやりとしていることが日に日に多くなっている。

何か病気なのかもしれない、医者に診せよう、と言っても、首を横に振るばかりだ。

「大丈夫、少し疲れているだけ」

そう言って、いつもふわりと微笑んだ。

ある晩、あることを思い出した。

彼女と会う数ヶ月前に海に出たまま帰って来ない兄。その兄が、残して行ったものがあつた。

それは螺旋状の大きな貝。船乗りである兄が、どこか航海先で見つけたものだろう。色も淡い珊瑚色で美しいものだった。

兄のことはもう半ば諦めかけている。もちろん生きていて欲しいという願いはある。しかし、船乗りという仕事柄、危険が伴うのも覚悟の上だった。

久し振りにその形見を手にとつた。

妻に見せてやろうと。

「お前は綺麗な貝が好きだろう？ これは兄がどこかで拾つた物なんだが、どうだ、なかなか珍しい形をしていると思わないか？」

さぞ喜ぶだろうと想像して、暖炉の前で身体を休ませていた彼女にそれを差し出す。しかし、俺の予想に反して彼女は言葉を失つた。

その美しい顔を恐ろしく凍りつかせて

翌日、彼女は姿を消した。朝靄のように。そしてあの兄の貝もどこにも見つからなかった。

残された俺は独り、呆然と座り込むしかなかった。頭を抱えて。

すると、どこからか歌声が聴こえた。優しく、切なく、温かく、哀しいその声。それは間違いなく彼女のもので。

何も考えなかった。ただとにかく、その声の元へと辿り着かなく

ては、と思った。

声は遙か彼方、海の遠方から響いてくる。耳にはない、直接、頭に。

足をもつらせながら外へ転がり出て、小さな一人乗りの船で漕ぎ出した。

その歌声を聴きながら、あることが脳裏に浮かんだ。

海の妖女。

その姿と歌声で多くの船乗りを惑わして海底に引きずり込み、溺れ死んだ者の肉を貪り食らう魔物だ。

そして、彼女の持つ螺旋状の貝殻には、そうして亡くなった船乗りの魂が閉じ込められていると言っ。

辺りに黒い気が渦巻く。

嵐でもないのに、大きく波がうねり、海底から突き出した大きな岩に当たって粉々になる。ここは呪われた海なのか。漂う空気が恐ろしく冷たく肌を刺す。

岩の中央に座る、一糸纏わぬ彼女の姿が見えた。

初めて見たあの夜と同じく白い肌を水に濡らし、長い黒髪を艶やかに身体に纏い、赤い唇からは多くの男を惑わす歌を紡ぎ出す。

あれが、彼女の真実の姿。

海の妖女……セイレーン。

そしてその岩の奥、暗い海に漂っていたのは、数年前に行方知れずになった兄の乗ったガレオン船だった。破れた帆を死者の長い衣のように引きずるマストが、幽霊船さながらの雰囲気醸し出している。

ただ違うのは、その船上に、生きた人間の姿が見えること。

どちらの名を叫んだか分からない。

彼女か兄か、あるいはその両方か。

刹那、またあの声が響く。

来てはいけない、あなたは殺したくない。

それでも、そこで全てを傍観していることはできなくて、前に進んだ。

もう一度、叫ぶ。万感の想いを込めて。彼女の名を。

船の甲板に、懐かしい姿が見える。今にも海に飛び込みそうな様子だ。

更にもう一度叫んだ。今度も、彼女の名を。ただそれだけを。

一瞬、セイレーンの無感情な目に光が戻った。それは、数年を共に過ごした妻の目だった。

こちらをしつかりと振り返る。歌声が止み、淡く、そして哀しげに微笑み。

その肢体が大きく傾いだ。

一瞬の間を逃さずに、船の乗組員が放ったフロントロック式の銃声が轟く。

しかし、彼女は海に飛び込んだ。弾は当たらなかった。セイレーンの胸を貫く代わりにそれが粉々にしたものは、あの貝だった。

珊瑚色の欠片が日の光に眩しく光った。かと思つと、海は穏やかな姿を取り戻していた。

その後、彼女の姿を見た者はいない。

俺は幾日も海に出てただ一人を探した。けれど、二度と会うことはなかった。

兄はあの後、数年振りに我が家へと帰つて来た。不思議なことに、行方知れずになった頃から少しも歳を取っていない。あの呪われた海域に入ってから、時が止まっていたようだ。

俺は、愚問だと分かつてはいるが、何故彼女が人を惑わしていたのかと考えずにはいられない。

夫婦として共に過ごした数年、彼女は人間だった。だからこそ、不思議でならない。

何故。

しかし本来の彼女は、海に巣くう魔物なのだ。人間が動物を殺すように、彼女も人を殺すのだろう。ただ己の命を繋ぐために。

そしてもうひとつ。

何故、人間である俺を伴侶とし、自分の身の衰えを感じながらも殺さなかったのか。

今となつてはそれを確かめる術は無い。

だけど確かなことは、あの共に過ごした数年の想いは偽りではなかったということ。

兄の命を奪おうとしていた時、呼び掛けに応えてくれたのだから。

もし魔物の心のままであったなら、そのまま歌を続けたことだろう。

俺はきつといつまでも彼女を忘れない。

例え魔物であろうとも、数年は、自分だけの美しい妻だった。

その時間だけは、彼女の心も人間だった。

俺に残されたのは、その思い出と、美しい貝殻に口付ける彼女の癖だった。

兄はそれをいつもからかった。相手がいなくならってそんなものにキスしてどうする、と。

それに俺はただ自嘲気味に苦笑いするだけだ。

この貝も、もしかしたら人の魂が込められているかもしれない、
と思いつながら。

今日もこの広い海のどこかで彼女は、哀れな船乗りの魂を集めているのだろうか？

(END)

(後書き)

短編、人魚ネタが続きましたが、全く逆のイメージです(^^;) 何となくダークな雰囲気の話も書いてみたくなり、挑戦してみました。

貝に魂を集めるとか、人を食らうと言ったあたりは作者の創作です。セイレーンではなく、アイルランドのメロウと言う人魚は人と結婚することもある、と某所で読みました。

どちらかと言うところちなのか、と思っただけねど、イメージで強いのがセイレーンだったので、そのままに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2324h/>

セイレーンの貝殻

2010年10月11日03時02分発行